

山麓探偵団通信

10月号

平成17年10月号 (2005-10)

このころ天候予報がなかなか当たりたりませんね。

十月の探偵団も十五日(土)は最高の快晴でしたが、十五日(土)の天候予報は、降水率80%の雨模様。ですから前日の夜七時に涙をのんで「中止」を決定し参加者に連絡しました。

ところが、当日(十五日)目を覚ますと「これが、晴れ」。曇りながらも「晴れ」。楽しみにしていた団員さんに申し訳なくて空を眺めては「どうにも気分が晴れなない」一日でした。

富士山麓は少しずつ色づき始めています。今年はドンケリもクルミも豊作で、森の生きものたちも喜んでいて、思っています。ナナカマドなどの木の実も例年より色鮮やかに感じます。

参加団員の感想

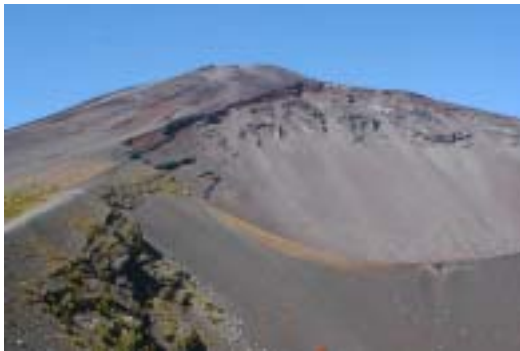
九月の探偵団で双子山から眺めた宝永山。その時から「宝永山に会いたい！」と心ひそかに思い、前日から期待で興奮状態でした。

快晴の五合目では、遠く大島から南アルプス連峰までくっきりと見える素晴らしい景色に感動。第一火口縁に立つたときは、あまりの巨大さに圧倒さ

れました。中腹に大きな穴を三つも抱えているなんてやはり富士山は雄大なのだと納得。火口底の赤いスコリア丘から見上げると溶岩流と十二薬師岩脈群が連なり、周りには火山弾がゴロゴロ、大噴火を物語っていました。

荒涼とした火口には植物が厳しい自然に耐え、しがみつくように生えています。火山砂を、ズルズルと滑り、倒木の森へ迷い込みながらも熊と遭遇することなくナナカマド、ダテカンバの樹林帯の中を須山口まで下山。歴史を学べた嬉しい一日でした。

【M・S】



< 富士山頂と宝永火口 > (伊藤団長撮影)

雲ひとつない青空と、風もない暖かく穏やかな一日でした。一昨日初冠雪したとは思えない美しい静かな富士山。新五合目から宝永火口へ。そして

森を抜け、水ヶ塚まで。

噴火口の脇を下ると、うれし楽しい気持ちで湧いてきて、自然と体が動き出しついつい走り出してしまいました。山頂を目の前に眺めながら陽に温められた石に腰掛けてのお昼、とてもおいしかったです。特に熱いお味噌汁は最高でした。

半月前とは様子が変わり、オンタテは枯れ、イタドリやダテカンバの葉は黄色くなり、ナナカマドの実も赤くコケモモは背が伸びて確実に季節が移っているのを感じました。

幾度同じ場所を訪れてもその度そこは違う世界なんだと改めて気付きました。帰り道、車を運転しながら「ああ、毎日の生活もそうか！同じ毎日を生きているはずないんだな」などとまた改めて思い、富士山を眺めました。心地よい空気と共に下りてきました。この次はどんな世界に入って何を感じるか、とても楽しみです。【S・O】

一口メモ *

宝永山(ほづえいざん)

富士山で最も目立つ寄生火山であり、宝永四年(江戸時代)の噴火で誕生した。

富士山南東斜面にあり標高は二、六九三メートルである。宝永山の西には巨大な噴火口が開いている。第一から第三と三つの火口がある。

十一月の探偵団活動の案内

自然観察の目を育てよう！

(野鳥の羽根のペンダント作り)

担当団長：木村 修 さん

(図鑑などの自然細密画家)

内容：野鳥の名前は図鑑で調べられますよね。でも野鳥の習性や暮らしぶり、そして体の仕組みなどを学び、嬉しくなります。今回も木村団長のお話を聞き、木を削り色をつけ美しい一枚の羽をペンダントに造ってみましょう！

活動日：十一月五日(土)・十日(木)

集合：午前九時、「あみん」に集合

参加費：二、三〇〇円+材料費

団員の材料費は事務局で負担

持物：弁当、虫眼鏡等

申込締切：それぞれ二日前までに、「あみん」をお願いします。

発行：山麓探偵団事務局

電話：〇五五五・六五・七〇二三

編集人：樋口 裕峯